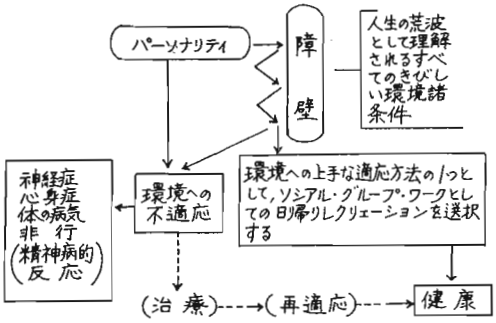
都市近郊レクリエーション林の研究（I）

都市近郊林における日帰りレクリェーション行動の現代的な意義について

宮崎大学農学部　中　島　能　道
東京農業大学　塩　谷　　勉

1. ソシアル・グループーワークとしての日帰りレクリェーション

われわれは，従来までの研究結果から「レクリェーションとは本質的に行動一次集団によって展開される行動である[1]」という理解に立って日帰りレクリェーションの欲求構造[2]を考えてきたが，現代人の不安の心理構造[3]を前提として，ソシアル・グループ・ワークとしての日帰りレクリェーションを性格づけると，図―1[4]に示すような理解が成立つ。



図―1，ソシアル・グループ・ワークとしての日帰りレクリェーションの性格づけ

2. ソシアル・グループーワークの特性

ソシアル・グループ・ワークを性格づける特性[5]を考えてみると，(i) ソシアル・グループ・ワーカーが指導するもので，(ii) 任意で自発的に参加できる集団によって余暇を利用して行われるところの，(iii) 一種の教育・訓練的過程である。(iv) その目的は集団の中の相互作用を通じて，個人のパーソナリテイの健全な発達と環境への適応であると共に，(v) 集団自体の望ましい発達である。(vi) 社会事業施設または社会事業的団体の活動として行われ，(vii) その対象はクライエント（要援護者）もしくは健全な市民としての生活空間における正常な行動が困難な成員をかかえた成員である，の7項目を掲げることができる。

3. 日帰りレクリェーションの在り方の吟味

欧米先進諸国の人々に見られる公園や遊園施設内において見られるマナーの良さ，徹底した共有財産という意識，そして公徳心の高さなどは，彼らが過去くり展げてきたレクリェーション運動の歴史[6]を見ればおのずから理解される行動様式であり，そこには確固たる社会規範の存在がうかがわれる。一方，わが国のレクリェーション対象地と考えられる各地で発揮されている行動様式は，まさにクライエント集団の問題行動に匹敵するといえるであろう。それゆえに，わが国における日帰りレクリェーションの在り方を吟味するに当っては，ソシアル・グループ・ワークとしての効果をレクリェーション活動の展開過程の中で期待する，という立場で考えるべきである。したがって，

1) 日帰りレクリェーションは一貫した計画性にもとづいて行われなければならない。

2) レクリェーション集団成員を指導するソシアル・ワーカーの役割を演ずる者を必要とする。

3) 都市近郊林をレクリェーション活動の好適地とするように整備しなければならない。の3点に対する十分な検討が当然に要望されることになる。1) はレクリェーション集団が自発的に，しかも教育・訓練的過程の効果を十分に考慮して事前に計画することであり，レクリェーション行動の結果を，ソシアル・グループ・ワークとして実り多いものにしようとする当初の努力である。2）は知恵があり，良識を具えた家族集団あるいは友人・知己集団が既に実行しているように，成員中の有能なリーダーシップ発揮適格者がその役割を演ずべきものである。3) は，「現代人にとって，より望ましいレクリェーション活動の対象地は，歩いたり自転車を利用するなど自力で到達し，十分に楽んで帰宅できる近郊の森林・緑地である」という理解に基づいて，当然に要求される行政機関の果すべき責務である。とりわけ，大脳生理学と色彩の感情効果

に関する研究成果[7]からも，現代人の精神衛生に近郊の森林・緑地が好影響をもたらすことが明らかにされているのであるから，実質的に有効な形に近郊林を整備すべきであろう。

参 考 文 献

1) 塩谷 勉，中島能道：大都市住民と森林，熊本営林局，昭．47，pp. 47～51

2) 中島能道，塩谷 勉：南九州の森林・緑地における都市住民のレクリェーション行動に関する研究（Ⅲ），日林九支研26号，昭．48．p．19.

3) 塩谷 勉，中島能道：前掲書pp．9～20.

4) 池見酉次郎，心療内科，中公新書，昭．41．p. 12 図—2を引用

5) 服部 正：ソシアル・グループ・ワーク，ミネルバア書房，昭．34，p．8に引用のアメリカ・グループ・ワーク協会の解釈を基礎にして要約

6) ジゼラ・コノプカ著（前田ケイ訳）：ソシアル・グールプ・ワーク：援助の過程，全国社会福祉協議会，昭．44，pp．6～27.

7) 杉靖三郎：季節とからだ，河出書房，昭．31，pp．183～186.